

仮 面

イヌイト

地域 アラスカ

長さ 28.0cm

## 「あそび・ゲーム・おもちゃ」について

7月26日から8月28日の日程で、第8回特別展「あそび・ゲーム・おもちゃ」を開催しました。

これまでの特別展は、サハリンやアラスカといった特定の地域や、ネネツ、アイヌなど北方に暮らす先住民に焦点を絞り、その文化を紹介するものがほとんどでした。

本特別展では趣向を変え、開催期間が夏休みと重なるので、できるだけ多くの子どもたちにも親しめる展示、参加しやすい行事を企画しました。

また、民族学の使命の一つには、「自分たちとは違う民族が周りにいて、それぞれ独特の文化がある」という意識を、一般に浸透させることがあります。今日では、テレビや本などで外国のことについて知る機会があふれていますが、「小学校学習指導要領」によると、学校教育では小学6年生になってはじめて、我が国と経済的・文化的に関わりの深い国のことを学習します。今回はできるだけ数多くの民族や国ぐにについて、子どもたちの身近にある玩具やゲームを通して知ることができ、併せてそれらを見くらべ、見つめ直すことができるような展示を目指しました。

展示は、「カタをつくる・ヒトカタにする」、「ミニチュアの世界」、「静と動のバランス」、「盤上ゲーム・カード・サイコロ」の4テーマから成り、全部で275点の資料で構成されました。以下に、その内容と関連行事を紹介します。

### 「カタをつくる・ヒトカタにする」

人形は、世界各地の民族にみられます。子どものおもちゃとして作られるものや、信仰や心のよりどころとして作られるものがあります。ここでは、人形や動物のかたちをしたおもちゃなどの製作過程に注目し、「ぬって・つめて・くるむ」、「かたをぬく・かたをつくる」、「ほる・けずる」の3つの視点から紹介しました。

「ぬって・つめて・くるむ」では、クマのぬいぐるみを形作っている数多くの布片とその製作工程やアイヌ、サミなどの北方民族の人形を展示

しました。さらに、日本伝統的なちりめん細工、手まりも一緒に紹介しました。「かたをぬく・かたをつくる」では、昭和20～30年代に日本で作られたセルロイドやブリキのおもちゃ、紙製の着せ替え人形、土人形・紙人形など、型抜きをしてヒトや動物の形にするものを展示しました。「ほる・けずる」では、木をはじめ素材となる石や<sup>きば</sup>牙を削り、形を作り出すものとして、東北各地のこけしや東南アジア、アフリカの木偶、木製人形、北欧を中心にした木製遊具を展示しました。

### 「ミニチュアの世界」

子どもたちは「ままごと」や狩猟ごっこなどの「ごっこ遊び」とおして、自分の役割や住んでいる社会のルールなどを学んでいきます。

イラン、ドイツ、イタリア、ペルーなど世界各国のままごと道具セット、アイヌのカヤック模型・イヌぞり模型やウイルトのトナカイぞり模型で構成しました。

さらに、おもちゃや<sup>たこ</sup>鼠を売っている江戸時代の店のミニチュア、日本の伝統郷土玩具のミニチュアセットなど、むかし懐かしい資料もありました。

### 「静と動のバランス」

こまもやじろべえも、自然界の中にある具体的なものの形をまねた玩具ではなく、一般に抽象玩具と呼ばれています。またこの2つは、バランスを保つ玩具であることが共通しています。

こまとやじろべえは合計で65点展示しましたが、4つのテーマの中では、最も多くの国・地域、民族を網羅しました。オランダ、ドイツ、スイスなどのヨーロッパ諸国から、インド、スリランカ、



ホワイトパズルコンテスト



中国、日本といったアジア地域、さらにアフリカ、アメリカ大陸にまで及びました。特に日本のこまは、その地域的な広がりとともに、江戸末期から明治初期に作られたバイガイ(貝)を使ったべいごま、昭和初期の木製こま、昭和30年代のプリキのこまなど時代による素材の違いも紹介しました。

### 「盤上ゲーム・カード・サイコロ」

人びとの交流や交易をとおして伝えられた郷土ゲームには、時間をへて、その地域や民族の間で独自の発達をとげたものがあります。たとえば、古代エジプトで遊ばれていた「セネット」という盤上ゲームは、ヨーロッパに伝わり「バックギャモン」に、中国、朝鮮半島を経て日本にたどり着いたものは「盤雙六」として独自の発達を遂げてきました。また、賭の方法がほとんど同じであるゲームが日本とインドネシアにみられますが、そこに描かれている絵は、日本の場合は富士、鷹、なすびであるのに対し、インドネシアでは、エビ、カニ、カメといった動物が登場します。

さいころやカードに使われる材料は、その地域の自然環境と深い関わりをもっています。中国西域やチベットには、ヒツジの足の関節を利用したさいころがあり、樹木が豊富な地域に住むインディアンでは、木や木の実を使ったコイン状やボウル状のさいころがみられます。

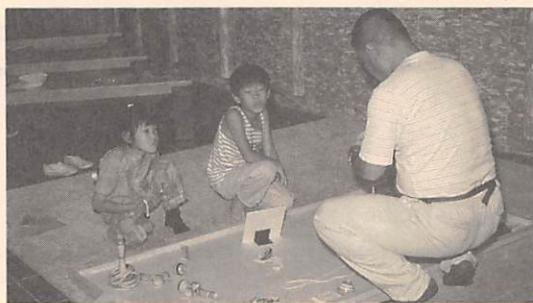
### 関連行事について

今回の特別展では、夏休みを利用してできるだけ多くの子どもたちに来てもらいたいとの趣旨から、次のような関連行事を開催しました。

- ・クイズラリー（7月30日、8月13日・27日）

特別展示室の資料、写真を見ながら、簡単なクイズに答えていきます。全問正解者には、北方民族のおもちゃ4点セットをプレゼントしました。

たいけんスポット



- ・こどもクラフト工房「やじろべえを作ろう」と解説会（8月14日・28日）

展示しているウイルトアのやじろべえと同じものをホオノキで作り、そのあと特別展示室をテーマに沿って解説しました。

- ・ホワイトパズルコンテスト（白いジグソーパズルにかく絵画展／8月6日・28日）

網走市内の小学生を中心に、白いジグソーパズルを配布し、それに身の回りにあるおもちゃやゲーム、当博物館の建物や展示資料を描いてもらいました。集まったパズルは、期間中特別展示室の外壁に貼って、来館者のみなさまにご覧いただきました。

このほか、特別展を観覧したすべての小中学生にイヌイトのうなり板キットをプレゼントしました。また、こまなどで遊べる「たいけんスポット」や、カナダに住むネツリック・イヌイトの遊び・ゲームを紹介するビデオコーナー、情報普及室には関連する本のコーナーを設けました。

この特別展を通して最も印象深かったことは、大変多くの親子の対話があったということです。それは「あそび・ゲーム・おもちゃ」という要素が、子どもたちにとってはふだん見慣れているもので、おとなにとってはむかし懐かしいものであり、ともに身近な存在であることによると思います。また関連行事は、主催者側としては不慣れなこともあり少々大変でしたが、子どもたちの本音や関心が何であるかを知る良い機会となりました。

最後に特別展の開催にあたり、ご協力いただきました、日本玩具博物館、日本郷土玩具館、遊戯史学会、横浜人形の家、梅林勲氏、遠藤欣一郎氏、スチュアート ヘンリ氏、増川宏一氏に心から感謝申し上げます。（学芸課 佐々木 亨）

# とんぼ玉をつくろう

講師/ジュウリーデザイナー 木村 正道 氏

とんぼ玉はガラスでできており、表面にはさまざまな模様が付けられています。そしてそれにはひもを通す穴があいています。とんぼ玉の歴史は古く世界各地の人びとの間で、身を飾るもの、交易品などとして使われてきました。

7月9日は、このとんぼ玉の魅力にとりつかれ、数多くの作品を個展や展覧会などを通して世に出しているとんぼ玉作家で宝飾デザイナーの木村正道氏を講師に招いて、とんぼ玉を実際に製作することに取り組みました。木村先生には昨年度も当館の講師としてお願いし、とんぼ玉の歴史や製作方法などとともに玉づくりの実技を披露していただきました。その場では、実際にとんぼ玉を作ってみたいという要望が多かったことから、本年度の講習会では受講者自身がとんぼ玉作りを体験できるように配慮しました。

講習会は小中学生を対象とした午前の部（土曜セミナー）と、一般を対象にした午後の部の二回にわけて実施しました。

とんぼ玉作りに取り組んだ人たちは、最初のうちは、ゴォーッという音とともにブンゼンバーナーの口から出るプロパンガスの青い炎に圧倒されていた様子でした。しかしこれも束の間で、先生の手元からいとも簡単そうに生みだされる玉をさっそく自分の手で、という意気込みとともにブンゼンバーナーとの「格闘」が始まりました。とんぼ玉作りに要する材料は、色とりどりのガラス棒のみで、これを加工するための道具としては離型剤をあらかじめ塗った鉄芯<sup>てつしん</sup>や玉を成型するための鑊<sup>くわ</sup>とピンセットなどが主なものです。

まずバーナーの炎でガラス棒を溶かすところから作業が始まります。ガラスの丸棒が、もとの色をなくして真っ赤になって溶け始めると、頃合を見計らって溶けた部分をゆっくり鉄芯に回転させながら巻き付けてゆきます。そうすると球形の赤い玉が形成されてゆきます。あまりにも短時間に姿かたちを変えるガラスの不思議さにまずここで



驚かされます。受講した人たちはそれぞれの段階でタイミングをつかむのに必死になっていましたが、鉄芯に巻きつけたガラスの玉に一様に感心したようでした。

この玉に模様がついてはじめてとんぼ玉といえるので、作業はまだ、さらに続きます。しかしながらこれから先は奥が深く、先生の細やかな手さばきを見つめて満足せざるを得ませんでした。例えば、色違いの細長く引き伸ばしたガラス棒をバーナーで撚りをかけ縄状にし、それを作っておいた玉の上に溶かす、あるいはあらかじめ数種類のガラス棒から作り出した「金太郎飴」状のカットガラスを、ガラス玉の上に溶かす、などです。前者がいわゆる「縄玉」、後者が「モザイク玉」といわれるものです。このような高度な技術は初心者の手におえるものではなく、受講者の皆さんが取り組んだのは、細く引き伸ばした色違いのガラス棒を玉の上に溶かす方法です。形は球形ばかりではなく、鑊やピンセットを使ってそろばん玉やラグビーボールに似たものも出来上がりました。

現在、イヤリングやネックレスなどの装飾品には多くのガラス玉が使われています。それらは長い歴史の中で培われたものであり、製作にはこのような工程を経ているということが実感できた講習会でした。受講者は玉づくりを初めて体験する人が大半であり、そのおもしろさに時間を忘れて取り組む姿がみられました。

# ゲームの起源をたどる

講師／遊戯史学会理事 増川 宏一 氏

第8回特別展「あそび・ゲーム・おもちゃ」に、貴重な資料をお貸しいただいた増川宏一氏より、7月31日に「ゲームの起源をたどる」というテーマで、豊富なスライドをまじえながらご講演をいただきました。講師は、将棋、チェスなどの盤上ゲーム研究の第一人者であり、お忙しい執筆活動の合間をぬって、毎年海外の博物館や遺跡をたずね、ゲームの系統や起源に関する調査を続けられています。以下に講演会の概要を報告します。

## 最初のさいころ

ヨーロッパや中近東の博物館には、紀元前二千～三千年という非常に古い時代の粘土でつくった小さな動物が展示してある。「おもちゃ」なのか、子どもの教育や狩猟の訓練のためか、あるいは動物を捕えるための祈りや占いのためのものかよく分からない。

そのようなものの一つにさいころがある。最初は、裏表の明らかな自然物、例えば貝殻、小石、木片、木の実、動物の歯などが使われた。紀元前数千年前の時代では、自然物のさいころとして、動物の足の関節が使われた。いびつな形をしているが、ふると4つの面のうちのどれかが上向きになる。表裏2面から4面の選択肢があるさいころへの発展であり、この骨のさいころは長く使われた。続いて、人間の手によって加工された4面体または6面体のさいころが創造された。

さいころをふった時に出る目は、人間の意志とは関わりのないものであり、さいころの目は神の意志の表われと信じられていて、それには無条件に従わなければならないという考えが生まれた。

## 占いからゲームへ

ゲームの起源は、このように占いの使われ方をするさいころを応用することによってはじまったといえる。それは以下のような段階を経たと考えられる。

1. 氏族の指導者や神官になぞらえた駒を盤上に置き、さいころの目によって（つまり神の意志に



よって) 駒を動かし、一族の運命を占い、判断する。  
2. 特定の人物ではなく、より多数の人たちを駒にする。また、一族の運命から多くの個人の健康、運勢へと占いの範囲を拡大する。  
3. 神の代行者として、具体的な相手を想定し、次第に2人で争う遊戯に発展する。

最初のゲームは、どちらの駒がはやく終点に達するかを争う競走ゲームであった。現在、博物館などで確認できる競走ゲームは、①多数の穴が2列に並んだ遊戯盤（キノコ形遊戯盤）、②<sup>ますめ</sup>柁目のある遊戯盤（一部分が敵見方共通の柁目になっている。ウルの遊戯盤）、③敵味方の共通の柁目が多くなった遊戯盤（20柁目の遊戯盤）、④総ての柁目が敵味方の共通の遊戯盤（セネット）である。

## ゲームの法則

競走ゲームのほかに、配列ゲーム、戦争ゲーム、包囲ゲーム、マンカラの4系統のゲームがある。また、盤を使わないゲームには一般にテーブル・ゲームと呼ばれるトランプ、<sup>マジック</sup>麻雀などがある。そしてゲームの発達過程には次のような法則がある。

1. ゲームは常により興味深く変化する。
2. ゲームは地球上の広い範囲に伝わる。
3. ゲームは使い勝手、遊び勝手のよいものになる。
4. ゲームは民族性を表わす。
5. ゲームは階級性を表わす。

ゲームは人間が創ったものであり、同時に人間の多面性を映しだす鏡である。これからも改良が続けられ、新しいゲームが生まれ続けるといえる。

## 調査概報

# 第2回海外民族調査

8.31~9.30

北方民族博物館としては2回目の海外民族調査をおこないました。

訪問施設はスウェーデンのヨックモックにあるアイテ・山岳サミ博物館 (Åjtte Svenskt Fjäll-och Samemuseum)、フィンランドのロバニエミにあるラップランド郷土博物館 (Lapin Maakun-tamuseo)、ノルウェーのカウトケイノにあるカウトケイノ野外博物館 (Guovdageainnu Gilišillju) です。

アイテというのはサミ語で貯蔵小屋のことだそうです。また、ラップランド郷土博物館はアルクティクムという建物の中にあります。この建物にはもうひとつ北極圏センターの展示があり、こちらではちょうど北海道の白老町にあるアイヌ民族博物館の資料展がひらかれていました。カウトケイノ野外博物館は町ではじめに建物が建った場所にあります。

調査目的のひとつは当館で収蔵しているサミの資料について情報をふやすことでした。具体的には、たとえば当館が収蔵している資料に高さ10cm、直径33cmの木製の桶があります。調査前には実際にどんなものをいれて使っていたのかはわかっていませんでした。アイテでは同じ資料をみつけることはできませんでしたが、ラップランド郷土博物館とカウトケイノ野外博物館の展示室には同じような資料が展示されていました。聞くと牛乳をいれクリームを集めるのにつかうとのこと。トナカイを飼育しているサミでも、トナカイのミルクの脂肪分が非常に多く、量も少ないた

め牛やヤギのミルクを利用しているそうです。アイテでみせていただいたフィルムではトナカイにまじってヤギも登場していました。

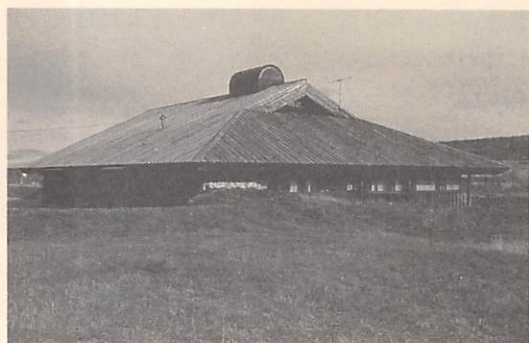
また、当館の講習会ではすっかりおなじみになったひも織りにつかう道具に箒があります。常設展示に展示してある箒の一本一本になぜ二つずつの糸を通す穴が開けられているのかをたいへん知りたく思っていました。こちらについてはあまり明確にはわからなかったのですが、一方の穴が破損したときのためというのが理由のようでした。

カウトケイノは人口3千人ほどの町です。その住民の約85パーセントがサミであるということでした、町には「サミの子どもが学ぶ学校」の先生になるための大学もあります。博物館の職員も皆サミで展示資料以外のこともいろいろ教えていただきました。山へ行くときなどは、皮靴の中に靴下代わりの草をいれるということも、今でもしているそうで、慣れるまでは草をほどよくつめることができず時間がかかるということや、テントの中で火に木をくべるときには、幹ではなく枝のほうを入口にむけるということなどです。これは枝先が燃えておちて入口とは反対側にある台所に落ちるのを防ぐため、こういうことは父親から習ったそうです。

現在はこうして調査したノートや写真がデータとしてあるという段階ですので、今後これらを整理していき博物館の活動に役立てたいと思います。(学芸課 笹倉いる美)



アルクティクム



カウトケイノ野外博物館

## ○平成6年度第1回講座

## オーロラの下でくらす

講師／当館学芸員 佐々木 亨

9月11日の講座では、講師が昨年の夏、約1か月間カナダ北西準州のイヌイトの村ペリーベイ周辺で行った考古学調査について、スライドを使いながら紹介しました。以下に概要を紹介します。

この調査では、遺跡・遺構からの情報だけで過去の文化を復元する従来の考古学的な調査手法に加え、比較的最近のものであれば、実際にそれを使った人に現場に来てもらい、当時の情報を聞き書きするという「民族考古学的調査法」をとった。

この方法で行った調査の一つに、石積み<sup>いしづみ</sup>の梁<sup>はり</sup>を利用した漁<sup>いし</sup>がある。7～8月に川<sup>せきやう</sup>を遡<sup>さかのぼ</sup>るホッキョクイワナを石の壁を使って30cmほどの魚門に誘導し、その先の捕獲池に追い込み、伝統的な形をしたヤスで突く。捕った魚は「ビルネック」と呼ばれる石積み<sup>いしづみ</sup>の魚用貯蔵施設に入れて冬の保存食にする。梁<sup>はり</sup>や貯蔵施設といった遺構<sup>いしづみ</sup>からだけでは、具体的な利用方法を知ることが困難であるが、実際に使った人とともに作業を行いながら観察、聞き書きをすることで、豊富な情報が得られた。

このほかに同様の調査を行った遺構<sup>いしづみ</sup>として、カヤックの変形を防いだり、使用しない間カヤックを動物から守るためのカヤック置き台、ホッキョクイワナを干すための皮網<sup>かわあみ</sup>を渡す魚干し台などがある。また、テントの裾<sup>すそ</sup>を押さえるために使った石がテント移動後に円形に残ったテントリングと呼ばれる遺構<sup>いしづみ</sup>も数多く調査した。

講座では調査結果とともに、ペリーベイ村における現代のイヌイトの生活の様子を、定住化政策、機械化された狩猟<sup>きやうりやう</sup>・漁<sup>いし</sup>撈活動から簡単に紹介した。

\*なお、講座のなかでカナダ在住の写真家坂本昇久氏が撮影したオーロラの写真を映写しました。

**Q** 様々な仮面のなかでも、特にリアルなイヌイトの面に興味を持ちました。どういう目的でつくられたものですか(表紙写真参照)。

**A** ご質問の資料は、アラスカの内地に位置するアナクトブクという町で作られている仮面です。イヌイトには木製や骨製の仮面を儀礼等に用いる伝統がありましたが、キリスト教の布教などにより今世紀初めにはその姿を消しつつありました。

ご質問のような仮面は、1950年代に若いイヌイトの男性二人が街で見たハロウィンの仮面をヒントにして、祭りで村人を楽しませようと作ったのが最初とされています。数年後、アメリカ本土から来た教師などの目にとまり、土産物<sup>みやげ</sup>として売れるということで本格的な生産が始まりました。

作り方は、ぬらしたカリブーの革を木型に張って顔を形作り、鼻を縫い付け、カリブーの前脚の毛<sup>け</sup>を眉<sup>まゆ</sup>やひげとして接着し、フードを模して顔の回りをオオカミやクズリなどの毛皮で縁取ります。

現代の仮面は木製・カリブー皮製とともに、伝統的な技術や精神文化を反映しながらも、芸術的価値に重きを置いた室内装飾品としての制作が大多数を占めているといえます。(学芸課 齋藤玲子)

## 博物館フォーラムのお知らせ

■博物館と地域研究 テーマ「アイヌ文化の成立を考える」

日 時：12月8日(木) 午前9時45分から午後5時15分まで

会 場：網走市サイクリングターミナル(網走市桂町4丁目7-2 電話0152-43-2078)

対 象：社会教育・学校教育・博物館関係者、文化財担当者、研究者および一般。

本フォーラムは、地域に根差した博物館づくりの一環として開催するもので、さまざまな分野の地域研究に資することを目的としています。今回は昨年度に引き続き、北海道におけるアイヌ文化の成立について、考古学的な視点から研究報告と講演、討論を行い、さらに理解を深めます。

講 演・講 師：菊地徹夫氏(早稲田大学)

平川善祥氏(北海道開拓記念館)

事例研究発表者：瀬川拓郎氏(旭川市教育委員会) 武田修氏(常呂町教育委員会)

田中哲郎氏(北海道埋蔵文化財センター) 田村俊之氏(千歳市埋蔵文化財センター)

入場は無料です。詳細とお申し込みについては当館にお問い合わせください。

## 執筆者ならびに出版社から 寄贈を受けた書籍 (7月～9月)

森野浩・宮崎信之編「バイカル湖 古代湖のフィールドサイエンス」  
東京大学出版会 1994

## 主な来館者

- 7/30 尾崎織女氏 (日本玩具博物館学芸員)、若林啓子氏 (横浜人形の家学芸員)  
8/9 荻原眞子氏 (千葉大学教授)、中川裕氏 (千葉大学助教授)  
9/9 皇太子ご夫妻  
9/19 石川陸郎氏 (東京国立博物館保存修復官)

## 観覧者動向 7月～9月

	常設展示	特別展示
7月	7,823名	1,164名
8月	8,575名	4,537名
9月	7,849名	-

第8回特別展の総観覧者数は、5,701名でした。

## みんぞく

### こうこ

### はくぶつかん

in Hokkaido (7月～9月)

- 7/6 イヨマンテを記録した36年前の映像発見・所有者の写真工芸社長が苫小牧市博物館に寄贈/D  
7/13 極北の民の芸術・北海道立近代美術館でイヌイット・アート展開催/D  
7/16 故山田秀三氏の所蔵文献 6,500点・姪夫妻が北海道立アイヌ民族文化研究センターに寄贈/D  
7/22 根室市の弁天島でオホーツク文化期の人骨発掘/D  
8/2 アイヌ民族博物館 (白老町) でアイヌ風俗画の代表作展示/D  
8/2 「ところ遺跡の森」に復元され

## 展示を観覧される皇太子ご夫妻



- た竪穴式住居6棟公開・体験学習も可/M  
8/9 紋別市で「第2回環オホーツク海文化のつどい」開催・豊かな文化再認識/D  
8/9 羅臼町でオホーツク文化期の住居全面から木の壁材確認・構造の解明に期待/D  
8/10 オホーツク文化期の牙製女性像根室市の弁天島で発掘/A S他  
9/4 シリーズ・美の故郷「アイヌ・炉端のアーティスト」9/11と2回特集/NK  
9/10 世界の10先住民族白老に集う・アイヌ民族博物館「先住民国際フェスティバル'94」で/A S他  
9/15 「ピリカノカ -アイヌの文様から見た民族の心」展・札幌市のかでる2・7と北海道開拓記念館で開催/D  
9/22 漆塗り副葬品が出土・南茅部町の縄文前期の遺跡で/Y他  
\* A S 朝日新聞 (道東北網版)  
D 北海道新聞 (オホーツク版)  
M 毎日新聞 (道東道北版)  
N K 日本経済新聞  
Y 読売新聞 (北網版)  
複数紙掲載の場合は、抜いの大きい方を紹介しています。

## その他の行事報告

- 9/10 土曜セミナーでは下敷きを材料にムックリ (口琴) に似せた楽器を作り、鳴らしました。

## これからの主な行事

- 11/20 講習会「サラニプをつくろう」  
講師：津田命子氏 (北海道ウタリ協会)  
12/27 ロビーコンサート'94「青少年

のための室内楽の夕べ」

演奏：札幌交響楽団員

- 1/22 講座「みやげの文化人類学」  
講師：齋藤玲子 (当館学芸員)  
2/7～ 第9回特別展  
3/14 「北方の船 北の海をすすめ」  
※別途観覧料を申し受けます。  
2/12 講演会「イタオマチツを復元する」講師：秋辺得平氏 (北海道ウタリ協会)  
2/19 講習会「ワークショップ3・インディアンの子珠ベルトをつくろう」講師：青柳文吉・笹倉いる美 (当館学芸員)  
3/12 講座「北方の漁撈文化」  
講師：渡部裕 (当館学芸課長)  
\*11/20の講習会は午後1時30分から4時まで。その他の講演・講座・講習会は2時から3時30分までです。これらの行事はいずれも無料です。12/27のロビーコンサートは有料で、午後6時開演、事前に申し込みが必要です。詳細については電話でお問い合わせください。

## 編集後記

梅雨も明けた7月後半の2週間、東京国立文化財研究所主催の保存担当学芸員研修に参加した。ふだん通勤時間が数分という生活を送っている身には、暑さと電車通勤はこたえたが、得るのは大きかった。講義や実験は実践的で、質問も多く受けて下さったので大変役に立った。そして何より、全国から参加したほぼ同世代の若い学芸員の方々と知り会えたことが良かった。

そのほかにもこの3か月間網走を訪ねて下さった方が多く、いつもにも増していろいろな話をする機会があった。夏は移動の季節だからなのだろう。収穫の秋にもう少し外に出掛けて行って、冬の定住生活に備えよう。(齋藤)